

志を胸に ― 苦難を乗り越えた宇都宮黙霖―

一八九四（明治二十七年）年、日清戦争中に当時の総理大臣・伊藤博文が広島を訪問した時、

「二度お会いしたい人がいる。」
と、あるご老人を招いて 先生。先生。」と呼ぶので、周りの人々が驚いたという逸話が残っています。

その人物は呉市広長浜出身の僧・宇都宮黙霖と言います。

黙霖は一八二四（文政七）年、呉市長浜の住蓮寺にて父・峻嶺、母・琴との間に生まれました。しかし、二人の結婚は認められておらず、生まれて半年後には父親の実家である西福寺（東広島市）に預けられました。三歳の時、今度は他のお寺に養子に出されました。しかしその養父の言うことを聞かないので、長浜の母の元へ帰されます。その後また連れ戻されますが、再び母の元に逃げ帰ります。こうして黙霖は、父親や母親や養父の間を転々としていました。その頃の黙霖は、自分の複雑な家庭環境に対する冷たい世間の目に反発し、手に負えない少年になっていました。

彼が十五歳のとき、母の妹がいた長浜の専徳寺に引き取られました。後年黙霖が 夫変お世話になった。」と語った叔父の常諦に

「夫より優れたものを身に付けなさい。心を磨きなさい。」
と教えられ、黙霖はここで初めてそれまでの自分を反省し、
（このままではいかん。）

と目覚め、勉学に熱が入るようになりました。

それからの黙霖は勉学のために努力を惜しみませんでした。呉市下蒲刈三之瀬の弘願寺の住職・円識のもとで学んだ黙霖は、二百七十人の門下生の中で頭角を現しました。先生が、
君にはもう教えることはない。」

と、別の先生を紹介するほどの生徒になっていました。

二十一歳になった黙霖は学びの旅に出ます。現在のようには大学はありませんし、雑誌や本、インターネットなどもないので、全国各地の有名な学者たちを訪ねては意見交換や討論をして、広く学識を深め、人格を磨きました。この頃から黙霖は江戸幕府に対して疑問を抱き、新しい世の中を創ろうという志をもち始めました。

しかし突然、黙霖に新たな不幸が襲ってきました。大阪で、高熱が続く大病にかかったのです。やっとの思いで故郷の長浜港にたどり着き、専徳寺で看病を受けました。しかし病気のせいで耳が聞こえなくなり、声も、発声はできても他人には聞き取れないという障害が残りました。

耳も聞こえなくなり、声もほとんど発声できなくなった黙霖は、苦悶の生活を強いられます。勉学もままならなくなり、自暴自棄の状態が続きました。自分の身の不運をなげいて悲しみに沈む毎日を送っていたのです。

しかし黙霖は、そのような逆境に負けませんでした。

自分は：いつまでも病気のせいにしてたり、不幸に悩んだりして何もしない人間なのか。

と、今までの沈んだ気持ちを振り切り、再び勉学に励むようになりました。

二十二歳で僧侶となり再び旅立ちました。二十九歳の時、江戸にいた黙霖は、江戸幕府を倒し、新しい世の中を創るという考えをまとめた原稿を、多くの学者や知識人などに見せて論争しました。論争と言っても耳も聞こえず、声も出ないので、すべて筆談です。そのうち江戸でも耳が聞こえない秀才の勤王僧」の存在は有名になりました。徳川幕府のおひざ元で、

幕府を倒そう。」

と、全国の知識人と意見交換するのですから、江戸幕府にとっては非常に危険な人物です。黙霖は、幕府や広島藩から追われる身となりました。

身の危険を感じた黙霖は江戸を去り、長州（山口）に行きました。そして、伊藤博文や高杉晋作そして桂小五郎（木戸孝允）など、多くの幕末の志士たちに影響を与えた吉田松陰と深く関わっていったのです。黙霖は松陰に自分の考えを書簡（手紙）で伝え、松陰の思想に大きな影響を与えました。ついに松陰に、

降参した。」

と言わせ、その後倒幕運動に踏み切らせたことから、日本の近代の歴史を切り拓いた陰の立役者と言われています。

江戸時代が終わり、明治の世の中になりました。黙霖は呉市の澤原家で晩年を送り、一九〇四年（明治三十）年に七十四歳でその一生を終えました。

黙霖は今、父母と共に東広島市の西福寺に眠っています。

